

資料涉狛余話

その45

明治35年1月1日に創刊された日刊紙「南信」の第2000号を祝って、明治41年8月28日と29日に蓬麻山人（松村正二）が、また、創立7年目ということで明治41年10月25日、野口愚然（ぐぜん・只次郎）が、「南信」創立当時の回顧を寄稿している。

愚然の記述を中心にまとめると、当時の下伊那は進歩派の「伊那公報」独占場で、政友会派は不利益を嘗めていた。そこで、明治34年頃から、高田茂を中心に新聞発行の株式を募ることになり、渡辺猶人の2階を事務局に、長野新聞を辞して帰郷した野口愚然を擁し、信産銀行の黒田忠一が便宜を図り、「編輯には羽生超然

君を起して快諾を得」、活字の買入れ、職人の手配や印刷機購入と具体的な段取りを進めた。しかし創刊号の手配が間に合わず、名古屋で編輯・印刷することになった、「病体の羽生君が猛然

「南信」草創期の記者・羽生超然を追って 上 嶋 不濁

と起つて天龍を舟で下り東海線を名古屋に」出向いて、「中藤の裏座敷を占領して、矢張り一週間計り初號の編輯に従事した」とある。

創刊号ということで、「春の梅と大観の虎」を愚然が東京から携えた。超然は「飯田で春臺初め故人の筆蹟を集めるに苦心して木版にして名古屋へ喚ぶ」と奮闘

の様がうかがえる。飯田からは元旦の発送に間に合わない矢の催促。ようやく刷り上がった新聞は、印刷職人とともに馬車を一台借り切つて土岐・中津・橋場から飯田に向かわせ、愚然と超然は馬と駕籠とで雪の大平を越える。「羽生君は大平峠で一度血尿を漏らされ

は初代編集長の野口愚然が体調を壊し社を出たり入ったりで、一時は社長の高田茂が編輯業務までせざるを得ないような時期もあるなど盛衰はあつたものの、日露戦争の戦況報道もあつて購読も伸び、広告も増えて、新聞社は軌道に乗つた。

口愚然のその後が知られていない一方で、毎号のように洋の東西、地域の政治経済にわたる広汎な記事や提言を書いていた羽生超然の名前は、明治37年元旦号を最後に「南信」から消える。その後、明治39年1月9日に「超然主筆『活殺』発行」という広告が掲載された。

た。當時の君の身体は實に察しやられたものだった」と愚然は書いている。その奮闘の甲斐あつて、創刊号は元旦に間に合い、1月11日の2号以降は飯田で順調に発刊された。

明治40年高田が県議となり退社する。社長に伊原五郎兵衛、編輯に安江天涯（再来子）を得た「南信」は、その後昭和13年の国家総動員法による新聞用紙の統制を受けるまで約36年続いた。

羽生超然とはどんな人物か――。数年係で作成中の地域の「文化関係人物事典」には掲載しなければならぬ人物ではあるが、その素性は定かでなく、行方も杳として知れない。

愚然は、病が癒えたのか、その後、鼎村長となり、また上飯田村助役、飯田裁判所内登記所司法書士などを務めている。

高田茂や野



「南信」広告のあつた『活殺』創刊号が南信州地域資料センターにあつた

羽生超然を探す手元にあ

る唯一の手がかりは明治39年4月30日発行の『活殺』第1号である。

目次頁におかれた奥付に

は次の記述が見られる。「編輯兼発行人・富田亥三郎、印刷人・大野亀太郎、印刷所・福岡進文堂（飯田町五百五拾番地）、発行所・飯田伝馬町（善勝寺境内）活殺書院」。富田亥三郎が超然なのだろうか？

また『活殺』表紙裏の目

次には、渡邊國武（諏訪高

島藩士の子爵・旧姓小池。

第2次伊藤内閣の大蔵大臣、

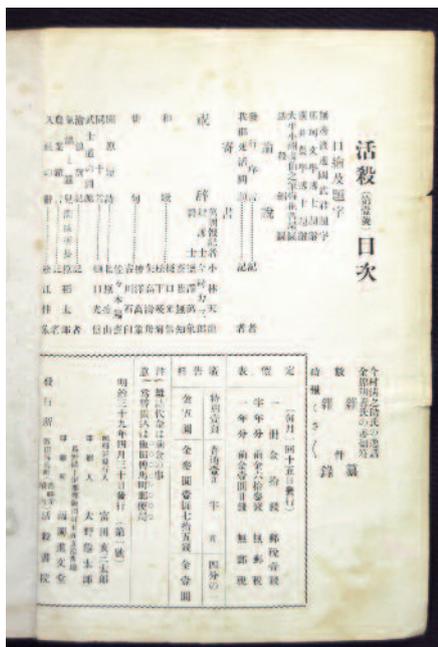
通信大臣、第4次伊藤内閣

の大蔵大臣）や那珂通世

（東洋史・文学博士）、横井

「南信」草創期の記者・羽生超然を追って 中 嶋 不濁

時敬（東京帝国大学教授・東京農業大学初代学長。「稲



発行所が善勝寺境内になっている羽生超然の発行した雑誌『活殺』

のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」という言葉は有名）とともに、大

平小洲の「梅花書屋図」が

口絵として掲げられている。

続いて記者（超然？）の

「活殺発行序言」「寄書」と

続くが、寄書に寄せられた

名前を見ると、

小林天龍（萬朝報記者）、

事専務）の「入社の際」が

掲載されているが、その文

中に「^{なま}ま羽生超然詞兄雜

誌活殺を刊してまさに警世

の筆を揮ひ」の一節があり、

また「雜誌活殺愈々羽生先

生主幹のもとに発刊」（齋藤

無知）や「超然子が雑誌を

出す」（今村力三郎）の一節

がある。どうやら「南信」

の広告通り、『活殺』という

雑誌が羽生超然が主筆とし

て発刊になったことは間違

いようである。

ここで活殺書院の記者を

名告る笠南松江伴象が登場

するが、この名前は、前年

12月突然退職した飯田中学

（旧制）教諭羽生東洋をめぐ

って、学校側に抗議するか

たちで「波風録」7回他、

反響に应じるかたちで1月

中、毎日のように「南信」

紙上に登場している。

つまりは、羽生超然の突

然の「南信」退社、羽生東

洋の突然の飯中退職の符号。

東洋心酔者松江の、超然主

筆雑誌『活殺』への記者登

用、またその時期の符合は、

超然が即ち東洋であること

を疑わせる。

東洋羽生芳太郎（永明）

もまた、超然と同じ羽生姓

で、かつまた草創期の「南

信」に原稿を寄せているば

かりでなく、「南信文学」欄

を主導していた観さえある。

東洋は、飯田中学校（旧

制）初代校長島地六五に迎

えられて明治34年3月から

母校に赴任した人である。

その経歴は、このコラムの

3・13及び25回で鎌倉貞男

さんが取りあげているので

参照にされたい。（次回に続

く）

東洋は飯田中学校（旧制）初代校長島地六五に迎えられて明治34年3月から母校に赴任した人である。学校ばかりでなく、日東学生団総裁を務め、校友会、文学、思想的にも青年の修養に大きな影響があったが、着任

わずか5年にして突然学校を離れた。飯田中学に赴任中、小学生だった樋口國登（日夏耿之介）の訪問を受け、

文学論を交わしたり（『竹枝町巷談』、中原謹司が師と仰いでつくった短歌会を指導したりした（『龍江村史』）。

東洋は、飯田を離れた後、明治39年4月からは再び岡山県の私立中学に赴任。その後は、青山学院大学や皇典研究所の教授等を務め、昭和5年7月63歳で亡くなったが、没後遺族によって

その蔵書が下伊那教育会に寄贈されている。膨大な資料の半分以上は郷土に関係するもので、堀家研究の稿本『堀の漣』（全15冊）他『堀家御記録并御略記』『堀家御系譜』（各1冊）、伊那

「南信」草創期の記者・羽生超然を追って 下 嶋 不濁

郡の町村歴史文化拾遺スクラップ『伊那迺道』（上下2冊）『伊那郡誌資料』『伊那人物誌稿』（18冊）『南信文学』（上下2冊）、『飯田風土記』（著者不明写本）などをみると、飯田を離れた後も終生まで郷土に対する眼差しを持ち続けていた人であることが看取される。長

姫神社境内に建つ羽生科山顕彰碑建立運動もすでに飯田を離れ東京にあったが中心的な役割を果たしている。そればかりか、堀家、太宰春臺や国学の研究を続けながらその成果や、短歌・歌論など「東洋」の名前で「南信」に寄稿を続けた。コラム13で紹介されている『南信文学』は「南信」紙上

に掲載された記事を中心に、地域の雑誌記事の切抜帳兼覚書である。『伊那迺道』にしても、松村蓬麻や「南信」紙上の文学的話題を扱いながら、科山・東洋についての項目はあるものの「超然」についての記載は一切ない。これは異様なことのように思われる。

ひとつの仮説を立ててみ

た。超然は「東洋説」である。明治34年帰飯時、「南信」創刊に借り出された羽生芳太郎は新聞社記者として「超然」の筆名を使い、学者としては「東洋」の号を使った。当初は立ち上げだけの協力のつもりが協力し続けていると、二足の草鞋を嫌う職場の圧力もあり、「超然」名での「南信」記者の活動を明治37年1月でやめる。

言の責任をとって辞めたなどという説に与するのにも一面的すぎるような気がする。病氣療養の退学や辞職の経歴をみれば、羽生本人の中にもボヴァリズム的な気性があったに相違ない。

以後は、「東洋」の号で寄稿を続けていたが、これにもまた圧力がかかったのか、学校を辞める決心をした。学校への辞職届けの理由が「病氣療養の為」とあるらしい（「南信」前掲）が、すぐさま東京で就職活動の上、岡山の中学校への再就職を決めたり、「東洋」名での「南信」への寄稿の数に変わりがなく、病を思えば、病気が原因の退職でないことは明らかだが、「教頭との確執」「野球亡国論」の発

一方で訴えることの社会的責務を感じて、学校を退職するや雑誌『活殺』の刊行を「南信」紙上で打ち上げ（明治39年1月）、東京に戻る自分に代わって、意気に感じてくれた松江を記者に雇い、超然主筆で創刊号（明治39年4月）は出したものの、東京・岡山と飯田では如何せん……、1号雑誌で終わった、というところか。明治44年6月から12月まで活殺生が「断魔剣」なるコラムで下伊那の人物評を中心に「南信」紙上を賑わすが、この人物が超然もしくは東洋と同一人物か、『伊那人物誌稿』などの異

同も不詳である。